

シリーズ「あきよウォッチング」 あきよの歴史その①『荒神塚古墳』

「荒神塚」は、ご存じ中央道瑞浪インター及び化石公園の入口にある岐阜県最大の古墳で、昭和35年10月3日に岐阜県指定文化財に指定されています。

その東方の山中には、露出した凝灰岩に横穴を掘って作られた戸狩横穴古墳群が13基並んでいます。荒神塚古墳はこれら横穴古墳群よりも少し時代が進んだ、今から1,500年ほど前、古墳時代の中期、4～5世紀頃に作られたようです。

その頃の人々の暮らしは、地面に穴を掘ってそのうえに屋根をかける竪穴住居やそのまま柱を立て屋根をかけた平地式住居に住み、農業に従事していました。そして、それらの農民を支配していたのが大豪族で、農民とは別に大きな屋敷を構えていたようです。人々の最大の関心事は、農耕に関する祭祀であり、巨大な岩石や山、川などを「神の宿るところ」と考え、社を作って祭祀の対象としたようですが、この頃から氏の祖先も神として祀られはじめ、氏神への信仰によって氏集団の結束を固めました。戸狩荒神塚古墳に埋葬されているのは、久々里に住んでこの地方を治めたと言われている八坂入彦命に関係のある「東濃地区一帯に権力をもっていた大豪族」であろうと考えられます。



その規模は、封土の直径約60m、高さ約8m、円墳では岐阜県下最大の大規模な墳丘です。墳丘の頂きに生えている大杉は、目通りの周囲が4m余もあります。東側の封土の一部が二ヶ所欠損しているほか未発掘のままほぼ完全な姿で残っています。墳丘は二段式で、石室構造は中期古墳に属する竪穴式石室ではないかと思われます。過去の道路工事により南半分が削られたとの話もあり、いくつかの古墳が存在した可能性があります。

四十年以上前、小学校の社会科で荒神塚のことを習った後、一人でスコップを持って「発掘」に行ったことがあります。寂しいところで怖くなってすぐに帰ってきましたが、少し前までは下の左の写真のようなたたずまいでした。

現在、荒神塚古墳の周りは道路が拡張され整備されていますが、その道路の先が時代の最先端を行くサイエンスワールドや超深地層研究所に通じていることに、時代の悠久の流れを感じます。



昔

荒神塚の

今



シリーズ「あきよウォッチング」

あきよの歴史その② 『田中の泥薬師』



今回『あきよの歴史その②』は、「荒神塚古墳」に続いて「田中の泥薬師」を取り上げます。

旧暦7月1日から始まる山野内全戸輪番制による朝・昼・夕のお茶番供養は、忘れられない懐かしい思い出です。菓子とお茶をお供えし、お祈りがすむと菓子が配られました。お年寄りによる御詠歌が歌われたことも記憶にあります。鐘を叩きながら泥薬師に向かう当番の後ろには、子ども達の行列が続きました。まだまだ豊かではない時代に、このお菓子はこの上ない楽しみでした。お茶番は今でも続いています。飽食の時代である今、子どもの列が続くことはありません。

田中泥薬師は病のあるところに泥を塗ってお祈りすると病や苦悩が治るとの伝承があります。「嫁入り前の娘の顔にあった大きなイボが、お薬師様に泥を塗ってお祈りすると間もないうちにぼろりと取れた」という言い伝えもあります。

以前は現在より南、土岐川沿いに安置されていました。現在「TSUTAYA (つたや)」がある辺りでしょうか。その後の耕地整理で現在の場所、四反田公園に移されましたが、その際には泥は落とさずに、筵かこもでくるんで運ばれたようです。泥薬師に関しては文献などはなく、その由来は知られていません。安置されているお堂の脇には灯籠が立っており、「寛延二歳二月吉日 施主 土岐郡山野内村 安藤市兵衛」と刻まれていることから、薬師如来は寛延2年(1750年)以前のものと推測されます。去年の「お身ぬぐい」(泥落とし大供養祭)の際、薬師如来像の裏面に何か縁起を証明できる銘が刻まれているかと期待されましたが、それらしきものは見つかりませんでした。

私たちが子どもの頃には、次のような言い伝えを聞いた記憶があります。

- ・ 明白寺(泥薬師北側にある山の上のお寺)に安置されていた薬師如来が大雨で寺沢を流れ落ち、土岐川沿いに安置された。
- ・ いつの頃か土岐川の大洪水の折りに薬師如来が字田中に流れ着き、後年明白寺に運び上げて安置したところ村中に疫病が流行り、元の川沿いの位置に戻した。

いずれが真実か今となっては知るよしもありますが、現在では次のような縁起がお堂の前の銘文に記されています。

今から約400年前、戦国時代の末期、甲斐の武田信玄が信奉する天台宗教により、村人は薬師如来を信仰するようになった。薬師如来を信仰すると衆生の難病や苦悩がことごとく癒り、一層尊敬の念を強めていた。

ところが武田信玄の勢力を駆逐するため織田信長の命を受けた美濃兼山城主森長可が東濃各地に兵を進め、神社、仏閣の焼き払いを命じた。村人たちは、お薬師さまを難から守ろうと、土中に穴を掘って隠して置き、世の平和を見定め田中の里にお祭りするとお薬師さまの安泰を喜び、それ以来村人たちは香華を供え、病のあるところに泥をつけてお祈りするようになった。

過日11月22日の供養祭の折には、歴史研究家であり陶都臨床教育研究所主宰・薬王山東仙寺元執事の中野正明先生が、その講演の中でこの縁起の裏付けをされました。

すなわち、今から四百数十年前の16世紀中頃、この東濃地方は武田信玄と織田信長の勢力争いに翻弄される戦乱の真っ只中にあり、当時、明白寺や定林寺、桜堂薬師等が焼き討ちされるなど、略奪・殺人・奴隷生け捕り等「濫妨狼藉」の世界でした。そんな中、軍勢が攻めてくると村人は米、衣類、台所用品等持ち物を地中に埋めて避難をしました。



現世利益信仰の対象となった薬師如来像が時の為政者に疎まれ破壊されることを恐れ、人々が大切な薬師如来像も共に地中に埋めたことは十分予測されるところです。

いずれにしても、私たちは貴重な歴史遺産・文化遺産として、そして心身の病や怪我を直してくださる信仰の対象として、「田中の泥薬師」を大切に守り後世に残していきたいものです。

「おんころころ せんだり まとうぎそわか」

シリーズ「あきよウォッチング」

あきよの歴史その③ 『天 狗 橋』

天狗橋は、国道19号線の山野内交差点（太陽社電気の所）から県道大西瑞浪線沿いに400mほど北へ行った所にある、日吉川に架かる橋です。

明世小学校で2月に学習発表会がありました。3年生が『明世の自慢』の発表の中で、「サイエンスワールド」、「地球回廊」、「デスマスチルス」、「荒神塚古墳」、「泥薬師」などとともに、この「天狗橋」について発表しました。

「天狗橋」について調べたグループの発表は次のような内容でした。



「天狗橋について」

天狗橋は国会議員のわたなべとくすけさんという人が作りました。天狗橋はアーチ式の石橋です。大正14年、縦50cm横40cm長さ（幅）50cmの石が20個、積み重なってできました。今は、コンクリートです。

天狗橋という名前になったのは、天狗橋をかけた川にあった淵が天狗淵という名前だったので、天狗橋になりました。淵というのは川の底が見えないところのことです。

天狗橋は日吉川にかかっています。長さ13.5m、道幅は4mあります。アーチ式の石橋の特長は、上が長くて下が短い形の石を並べていきます。

天狗橋のある場所について説明します。マンモスプールや観月荘があります。この道を進んでいくと、太陽社電気があります。太陽社電気まで来た道をもどっていくと橋があります。それが天狗橋です。

アーチ式の石橋はじょうぶです。どのくらいじょうぶか実験でみせます。ここに川が流れています。これが川の兩岸です。ここにまっすぐな橋をかけたとします。すると、橋は落ちてしまいます。だけど、これをアーチ式にすると、落ちません。なので、アーチ式の橋はじょうぶです。

天狗橋については、文献等では詳しい記録は見つけれませんでした。明世小学校の3年生の発表のとおり、大正14年に石を積み重ねて橋を架けたことは確かなようです。それ以前に橋があったのかどうかはわかりません。右の写真は、昭和6年に青年団の勤労奉仕によって行われた道路整備の様子です。90歳を超えられたようなお年寄りにお聞きすれば分かるかもしれません。いずれにしても、当時としては最先端の架橋技術で構築されたものと思われます。

現在の橋は、この石組の下端部をコンクリートで補強し、さらに、両側を2回にわたってコンクリートと鉄筋で拡幅し、道幅を当時の2倍程に広げています。当時は道路面ももう少し低く、現在70代ぐらいの人からは橋の欄干から下の日吉川に飛び込んで遊んだということを聞きました。今でも橋の下に下りてみると、大正14年当時の石組がそのままに見ることができます。

昭和30年代は、この橋の下やもう少し下流の「丸淵」と呼んだ所が、子ども達の水遊び場でした。学校にプールもなかった当時、体育の水泳の時間でもここで泳ぎました。天狗橋の真下の辺りはかなり水深も深く、中学生がもりを持って潜り、鮎を突いてきたことも記憶にあります。水もきれいでした。「天狗橋」の横には「天狗岩」がそびえています。岩のふもとは石の底の下に石仏も安置され、うっそうとした草木に覆われた中に「天狗が住む」という言い伝えもなるほどと肯けます。

天狗橋上流200mと下流250mの流路450mには、岩が水流で削られた、スプーン型、流動型、溝穴型、甌穴型、複甌穴型等、変化に富んだ甌穴群が見られます。日吉川の甌穴は県内でも飛騨川の飛水峡に次ぐ珍しいものです。現在の水面より3m~3.5mの高さのところにも溝穴型、円形の甌穴群が見られることから、土岐川と同様、土地の隆起（河岸段丘）があったものと推定されます。

また、天狗橋の上流には、かつて小規模な水力発電所もありました。山野内は発電所があった辺りから農業用水を引き、田植え時期の水や防火用水として利用しています。

私たちの周りには、掘り起こせば興味が尽きない歴史のロマンがたくさんあります。



シリーズ「あきよウォッチング」

あきよの歴史その④ 『戸狩城』

『戸狩にお城があった。』 皆さんご存じでしたか？ この瑞浪市内には戸狩城のほかに鶴ヶ城、小里城、萩原城、深沢城、猿子城、宇留輪城等全部で13城があったそうです。今回の郷土の歴史探訪では私たち明世町戸狩にあった「戸狩城」についてお伝えします。

1570年、武器を持ち国内の宗教武装勢力で政治に大きな影響力を持ち始めた僧侶は全国統一を図ろうとする織田信長にとり、軍事戦略上邪魔な存在になりつつありました。中でも織田信長に対抗し、最大権力を持つ全国の一向宗(浄土真宗)門徒の武装決起が、この後、11年間続く『石山合戦』即ち宗教戦争の幕開けとなったのです。当時この東美濃地方は織田信長が治めていましたが、未だ大きな権力持たず織田信長の配下にあった徳川家康は武田騎馬軍団の岩村城攻略の際も信長から3千騎の援軍を得ていました。徳川方は当時最強と言われた甲州武田勢に北条氏政、山県昌景を加え総勢3万の軍勢の猛攻撃に対抗できず一日とからず岩村城が陥落したとのことです。

その時活躍した人物に甲斐武田信玄の二十四将の一人と言われる重臣で伊那郡代の秋山信友という武将がいました。秋山信友は文武に優れた名将で武田家二代にわたり仕えたとの記録があります。その部下(武将)に仁木(山中)藤九郎なる者がいました。仁木藤九郎は秋山信友の命を受け、織田家と武田家の勢力争いの狭間にあったこの戸狩に先鋒隊として乗り込み城郭を築く計画でした。城郭を築き戦(いくさ)の拠点として、織田勢、徳川勢の攻撃から防御できる砦を築こうとする目的だった様です。

その仁木藤九郎が城郭を築くため、民家の雨戸を狩り集めたとの事で、後に『戸狩』と名づけられたとの事です。

但し、近年発見された歴史の資料から戸狩城は中世代(1570年)以前から存在し、既に織田信長方の支配下にあったとの説があり、有力になりつつあります。

いかがでしたか？ 私たちの住んでいるこれほど身近な場所にこのような歴史が存在したとは、何とも歴史ロマンを感じるのではないのでしょうか？

戸狩城跡は私たちにとってはそれほど遠いところではありません。是非ウォーキングか散歩で立ち寄り、城址の空気を感じ、あなたなりの瞑想にふけてみてはいかがでしょうか？ 明世町民ならではの新たな発見があるかも知れません。

＜城跡保存について＞

・昨今、城跡では竹が群生し始めています。その筍を求め、猪が曲輪の切崖に孔を掘るため、その斜面が崩落しつつあります。この歴史の遺物を地元民の手で守っていかなければなりません。

＜行き方＞運動公園から白山神社・清来寺方面へ遊歩道を登り、山頂U字カーブを20m下った右側の道の無い、雑木林を25m下った地点が城跡の北側の作平地となります。



戸狩城郭跡 曲輪



＜城跡状況＞標高270m余りの山頂に本丸跡と見られる広場があります。それより下には高さ3m程の段々畑状に曲輪が点々と存在しています。城跡と知らなければ分からない雑木林ですが、所々に土留めの石が並べられています。又敵を一箇所に集中させるV字の堀跡があり、戦場向けに築城された城であることが窺えます。

シリーズ「あきよウォッチング」

あきよの歴史その⑤ 『江戸の昔、山野内と河合が争った』

江戸時代、今の瑞浪市は40の村に分かれていました。各村は、それぞれ、天領（笠松代官所）、旗本領（馬場領、遠山領）、藩領（岩村藩、尾張藩）により分割支配され、戸狩は天領・明智遠山領、山野内は岩村藩、月吉は天領に属しており、明治4年（1871年）7月14日の廃藩置県詔書においても、戸狩、月吉は笠松県、山野内は岩村県に再編されています。

このように分割支配されてはいましたが、隣村の関係は良好で、お互いに助け合って生活をしていました。

しかし、一旦事があると平常仲のよい村同士も抗争を起こし、同じ藩に属する村でさえ互いの争いを江戸評定所まで出訴したことも珍しくありませんでした。抗争の原因は、山論、水論が多かったようです。山間地帯の土地柄だけに、土地は農民の財産であり、凶作・豊作が直ちに村の浮沈に関係した江戸時代にあつては、木草山における入会採草権や水利問題は大切であり、利権を犯されると村と村とが争論を起こしました。江戸出訴となれば数年はかかり、経費の村民負担も多大（110両費やしたという記録も残る）でしたが、それでも農民たちは生きる権利を守るために村民一致、亡村覚悟で自村の立場を主張しています。

瑞浪市史によると、近隣の村同士で争われた次のような記録が残されています。

事 件 名	発 生 年	西 暦	論 争 村 名	訴 訟
大戸井水論	寛文10年	1670	市原×山野内・戸狩・寺河戸	岩村出訴
天狗沢井水論	元禄11年	1698	山野内×河合	江戸出訴
字広瀬川敷論	宝永元年	1704	戸狩×寺河戸	江戸出訴
狭間洞境論	享保14年	1729	山野内×戸狩	江戸出訴
十三井水論	享保15年	1730	神籠×戸狩・山野内・寺河戸	岩村出訴
松ヶ瀬井水論	嘉永2年	1849	戸狩×小田	内諾

<天狗沢井水論>（元禄11年、1698年）

今回は、これらの争いの中で山野内村と河合村が争った天狗沢水論を取り上げます。両村は共に岩村領に属しましたが、岩村藩では決着が付けられず江戸評定所まで出訴しています。

山野内村ではしばしば水不足のことがあり、貞享4年（1687年）、岩村藩に工事費補助を申請し、元禄6年と同9年の干ばつを受けて天狗沢に新井堰を築き、水を引きました。しかし、同堰から約200メートル下流の山野内村分には、貞享2年に河合村の願いで河合村の井堰が築かれていたことから、川上で水を取られては一大事ということで、河合村が大挙して山野内井堰を切り落としたことから事件が発生しました。岩村藩では落着せず、山野内村が江戸評定所に出訴しました。

河合村の主張は、「すでに寛永14年（1637年）以来、山野内村の了解を得て月吉川から引水している。自村内の川であっても水利権は別である。」というものでした。一方、山野内村は、「水は共有のものである。したがって、貞享2年河合村困窮の時にも、山野内村旧井堰の川上に河合村井堰を築かせている。こうした厚意によって引水が可能になった昔のことを忘れて、いま山野内村井堰を再三にわたって切り落とすことは不法であり、河合村が態度を改めなければ河合村井堰そのものを撤去せよ」と主張しました。

評定所は、山野内村の主張を認め、河合村に対して山野内村井堰の切り落としを禁止する一方、河合村井堰の水利権も認めて、河合村井堰の場所が山野内・月吉両村川敷境であることから、河合村から月吉村へ井堰料米年八斗の納入を命じ、半分の地主である山野内へは、今回争論となった山野内村新井堰の永代水利権取得と棒引きということで、元禄12年3月に採決を下しています。

100年あまりを経た文化3年（1806年）にも、山野内村新井堰を河合村村民が再三に亘って切り落とし、数十日に及ぶやりとりのあと遂に夜番が河合村村民2人を現行犯で捕らえ再論争となりました。しかし、この時には、山野内村が元禄12年の評定所判決文書を証拠として提出したため、岩村藩は直ちにこれを認め、一方的に山野内村の訴えが通っています。

こうした歴史を経て現在の私たちの生活があることを思うと、感慨無量です。

旧河合村の井堰跡と取水口



旧明世村の新井堰跡と取水口



シリーズ「あきよウオッチング」

あきよの歴史その⑥ 『月吉 月の宮神社』

昨年 11 月 7 日（日）開催の「あきよウオッチング」のコースにもあり
ました月吉月の宮神社。毎年 8 月終わり頃には二十夜様祭りが行われ小
学生の作った行燈が飾られます。

月吉は、平安時代から「月のおさがり」を詠んだ歌が知られていて歴史
のある里です。

「榊葉にかけし鏡の面影と 紙も見ません月の休む間」・・・西行法師

「月のおさがり」はお月様の排泄物（月の糞）を意味します。
巻貝の殻の中に鉱物が入り込み、殻が溶けてらせん状の見事な「月
のおさがり」が作られます。

この「月のおさがり」はお月様が空に昇り、月吉の里で一休みさ
れ、その時に残されたものだと言われています。

月の宮の伝承もこのことに由来し、「月のおさがり」は安産のお
守りとしても霊験あらたかだったとのこと。

そんな月の宮神社にまつわる昔話をご紹介します。

○月のお下がり・・・

月吉の入口から左へとって 5～6 町いくと、小さな盆地へ出ます。そこは小川にそって大小さ
まざまの田圃が並んで、稲が青々と伸びていました。ここは、とても静かな山合いで、春はうぐ
いすの声のどこかに聞こえ、秋はほうじろや四十雀が、チチ、チチと田圃の回りの林をめぐって
さえずっていました。

里の人は、ここを正馬様と呼んでいました。正馬様のあたりは一面のさば山で、その山膚には、
背の低い松やつつじが生えていました。

その赤松林の陰で 6 5、6 歳のおばあさんが、小さなつるはしで、山をガツンガツンと掘って
いました。おばあさんは、これで 3 日もここを掘っているのです。

「おばあ、何しとるんや、ああ月のおさがりか」

田圃の水見にきたお百姓さんが声をかけると、

「おお、月のおさがりや、孫の初産じゃでう、いいのを掘って孫にやろうと思って」
痛む腰をさすりながら答えました。

昔、月吉のまん中にとってもきれいな池があって、天の神様たちは月
の手鏡と呼んでいました。その池のほとりに大榎の木があって、そこ
へある時お月様がおりて、池にうつる自分の姿にみほれていました。
その折、お月様は月吉の里へたくさんのおさがり（糞）をしたのです。
それが土に埋もれて固い石に変わったというのです。（本当は、巻貝
の化石で、ビカリアというのですが）

昔からそのおさがりは、安産のお守りだと言われていました。
だから、月吉からお嫁にでた者は、お守りのおさがりをもらったこと
でしょう。

このおばあさんも、可愛い孫娘の初産のために、月のおさがりを探
していたのです。せっせと探したおかげで、とうとうその日、とても立
派なおさがりを見付けました。固いさばの中から、らせん状に巻いたお
さがりを見付け、おばあさんは顔をもみくちゃんにして喜びました。掘り
出したおさがりは、長さ三寸（十センチ）以上もある、めったに見付け
られないものでした。白い膚のはげたところから、淡い緑の宝玉がのぞ
いていました。この宝をもらった孫娘の安産はまちがいないでしょうし、
生まれた子はすくすくと育つことでしょう。



御神体の屋代



ビカリアの化石



月のおさがり



シリーズ「あきよウォッチング」

あきよの歴史その⑦ 『清来寺』

戸狩の東外れの山あい、「岩屋不動」と呼ばれ親しまれているお寺があります。正式名称は「巖谷山清来寺」と言い、永徳年代（1381～）に寺河戸村の南波氏が荒廃した天徳寺から不動明王を戸狩の岩窟に移し、祀ったことに始まります。

その後、寛文元年（1661）「不動山大聖寺」と命名されましたが明治維新のとき廃寺となり、これを惜しんだ京都二条出身の常寿院萬字義山法師が、今の地に「巖谷山清来寺」として再興し現在に至っています。

ご本尊に不動明王、歓喜天、大黒天、文殊菩薩が祀られています。



(岩窟のお社)

本尊 (1)

由緒ある「不動明王」は県指定の文化財でしたが、昭和44年火災により焼失したため、現在の本尊は同年に四国からお迎えされました。

不動明王は、大日如来がお姿を変えて現れ迷いを断ち、苦難を救い、楽しみを与えるとされています。



(不動明王)



(歓喜天)

本尊 (2)

秘物「歓喜天」（通称聖天さん）は、象の頭を持った神様が二人抱擁する、高さ10cm位の像ですが普段は拝観することができず、筒の中に納められています。今回特別に拝観し写真の許可をいただきましたので掲載します。

歓喜天は霊験あらたかで、一心に祈れば何らかの形で救いの手が差し伸べられますが、いい加減に信仰するとバチが当たるとも言われます。難病やけがの治癒、夫婦円満・子授けなどにご利益があるとされています。

本尊 (3)

不動山大聖寺のころ西宮大神宮から「恵比寿・大黒天」をお迎えし、岩屋に祀られております。商売の神様で毎年、1月5日には「五日恵比寿」として盛大なお祭りが行われ、近郊近在の方が千人以上参拝されています。

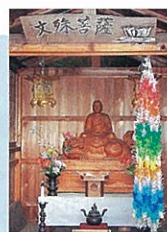
年末から戸狩の役員多数が準備に取り掛かり、当日は早朝からおでん・甘酒などを用意して参拝客をもてなしております。



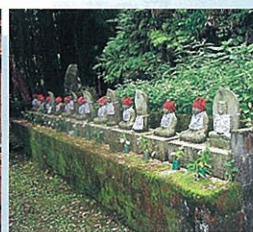
(恵比寿・大黒天)

本尊 (4)

白山神社側から登って行くと駐車場のすぐ脇に社があり、3人寄れば文殊の知恵と言われる「文殊菩薩」が祀られています。また、ここから本殿にかけて、124体の弘法さんが並んでいます。この内88体には四国88寺の砂が詰められているそうです。家内安全・水子供養に近郊から多数の弘法さんが奉納されています。



(文殊菩薩)



(弘法さん)

近くにあるものの知らなかった方もおられることと思います。

是非参拝されてみてはいかがでしょうか。

*参考文献：「みずなみのまつり」「ふるさと瑞浪」「土岐川上郷第三部」 *お話：住職 武田俊恵氏

シリーズ「あきよウォッチングあきよの歴史」のバックナンバーは、瑞浪市ホームページ内に掲載されています。

※瑞浪市ホームページ→ [地域のまちづくり](#) → [明世地区まちづくり推進協議会だより](#)

シリーズ「あきよウォッチング」

あきよの歴史その⑧ まとめ編

このコーナーでは、これまで7回にわたって明世地区の様々な史跡を紹介してきましたが、今回はそれらをまとめてみました。ぜひウォーキングの傍ら、郷土の宝を訪ねていただくことをお勧めします。

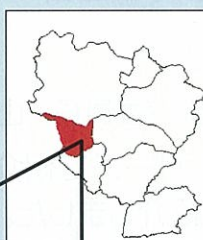
月の宮神社 (月吉)



毎年8月には二十一夜様祭りが開かれる。
お月様が一休みされその時残されたとする「月のおさがり」(ビカリヤの化石)は、安産のお守りとされる。

西行法師の道 (月吉 伝承)

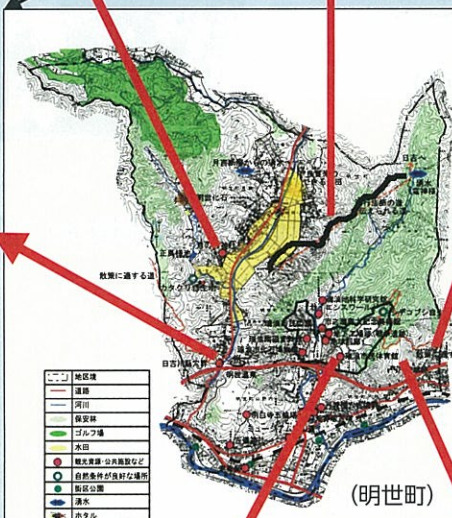
西行法師が歩いたと伝えられる尾根づたいの道。
大應寺の山門前には、西行法師の歌碑がある。



(瑞浪市)

天狗橋 (月吉・山野内)

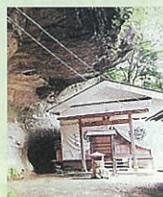
大正14年に、日吉川に掛けられた石橋で、今も礎石が残る。
近くには発電所跡、水の急流が石に穴を穿った甌穴群、山野内や河合へ農業用水を引くための取水口などがある。この用水については、江戸時代に山野内と河合との間で、江戸評定所まで訴えた水争いがあった。



(明世町)

岩屋不動尊 (戸狩)

1381年に起源をもつ、
巖谷山清来寺が正式名称。
大きく迫り出したサバ山の崖の下にお社がある。



不動明王や恵比寿・大黒天、文殊菩薩、124体の弘法様などが祀られ、象の頭を持った神様が二人抱擁する、秘仏「歓喜天」もある。



毎年1月5日の「五日えびす」には多くの信者が参拝する。

田中泥薬師 (山野内)

今からおおよそ400年前、織田信長と武田信玄の争いから守るため、地中に埋めて隠したと伝えられる。病のあるところに泥を付けてお祈りすると平癒すると信じられ、多くの信者が参拝をする。



荒神塚古墳 (戸狩)

中央道瑞浪IC及び化石公園の入口にある。今から1,500年ほど前に作られた古墳で、久々利に住んで東濃地区一帯を治めた大豪族の墓と考えられる。岐阜県下最大の円墳である。近くには戸狩横穴古墳群、第二次大戦中に化石山に掘られた地下軍需工場跡、化石博物館、サイエンスワールド等がある。



戸狩城址 (戸狩)

織田信長と武田信玄が争った田中泥薬師の頃、武田方の仁木藤九郎が先鋒隊としてこの地に乗り込んで民家の雨戸を狩り集め、城郭を築いたのが「戸狩」の地名の由来であるとの説がある。
しかし、最近ではそれ以前から戸狩城は存在していたとの説が有力である。標高270m余りの山頂に本丸跡と見られる広場や、曲輪、空堀、土留めの石と見られる痕跡があるが、今では雑木林となって見分けにくい。

〈参考文献等：「瑞浪市環境基本計画」、瑞浪市商工課各種資料〉

シリーズ「あきよウォッチング」 あきよの歴史その⑨ 郷土の寺院『雲松山 大應寺』

紹介者

美濃瑞浪第三十番札所
雲松山 大應寺
第27代住職 武田 真優



当寺院の正式名は「雲松山大應寺」といい臨済宗妙心寺派の寺院で、本山は京都の「正法山妙心寺」です。

本尊は聖観世音菩薩で、脇本尊は薬師如来です。昔、成瀬七良左工門と山内庄右工門（成瀬氏の妻の弟）が開基となり、美濃加茂市蜂屋町にある瑞林寺の第八世伝宗大和尚の弟子、亀嶽和尚が当寺院に招かれて、今から355年前の明暦三年（1657年）に創建されたと記録があります。その後、文化五年（1806年）11月、今から206年前に庫裡が全焼しており、現在の庫裡は150年程前に創建されたものです。



当寺院は、県道より数メートル入った右側に、「雲松山大應禅寺」と彫られた寺標が建っております。そこから、緩やかな坂道を80メートル程行くと、参道の左側に「納経所」と太く彫られた石碑が立っております。その碑の下部には西行法師の歌が刻まれており、『よる昼の さかいはここに 有明の 月吉日吉 里をならべて』とあります。時折、見学者がこの歌を写しているのを見かけます。更にその奥、坂を登ること約百メートルの所に当寺院の山門があります。山門の右側には「心の池」があり、中央の岩の上には石造の弁天様が祀られています。山門をくぐると境内には、鐘楼、観音堂、月塔、納経供養塔等が建っています。



当寺院の建築物の中でも山門は最も古く、今から約200年前に万場家（屋号）の三代目山内政右衛門幾道が一基進で再建したものです。屋根棟の表側には山内の家紋と裏側には寄進者の「政」の字が入っています。山門は昭和56年に屋根の葺き替えを行っていますが、当時の瓦がそのまま使われております。



鐘楼

梵鐘は昭和44年10月、明治百年記念に世界平和を祈願して造られたもので、大本山妙心寺の国宝で「黄鐘調の鐘」を模したものであり、形も大きさもほぼ国宝と同じで、重量は百六十貫（600kg）もあります。また、梵鐘の側面には当時の妙心寺管長で梶浦逸外老師の直筆の名が彫られています。この梵鐘の制作に当っては、先代住職の善教和尚と梵鐘の権威者で三重県桑名市の中川正和氏が妙心寺まで足を運び、黄鐘調の鐘を綿密に調べ上げて鑄造したものであります。

鐘楼の西側にある「月塔」は、寛政十一年（1799年）今から213年前に信州の石工で中谷幸蔵の作です。この塔はとても重厚観があり、基礎部分は岩盤で支えられていますが現在においても狂いもなく安定しております。また、塔の彫刻の技術は、機械に頼る現代の石工でも製作することが非常に難しいと称賛されています。道具も乏しい時代に造られたものと思うと当寺院の自慢であります。



月塔



納経供養塔

納経供養塔は今から275年前の元文二年（1737年）に建てられたものです。施主は山内儀右衛門で自身の父母供養の為に建立されたものであります。塔身には、梵字で金剛会の四仏が刻まれており、また、その下の台の四方には288文字の仏頂尊勝陀羅尼経が同じく梵字で刻まれています。

境内のほぼ中央に昭和56年5月に再建された観音堂があります。お堂の中には西国三十三所の観世音菩薩像が祀られており、その傍らには白梅の古木が植わっていて参拝する人々の心を和ませています。



観音堂

『有明の 白梅香る 観音堂 今日命を 守らせたまえへ』 合掌

雲松山 大應寺の場所：明世町月吉912番地（若宮八幡神社の西側）

シリーズ「あきよウォッチング」

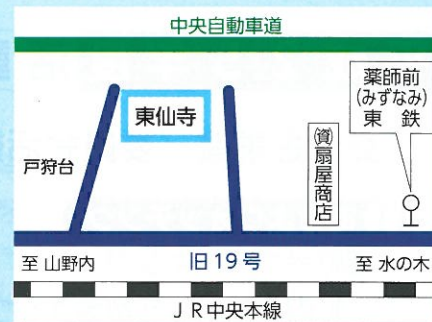
あきよの寺院その② 『薬王山東仙寺』

薬王山東仙寺 美濃瑞浪三十三霊場 第二十八番札所

御 本 尊 薬師如来

宗 派 臨済宗妙心寺派

所 在 地 瑞浪市明世町戸狩636番地



本 堂

そこで信仰されたのが、戸狩城の真下にある薬師如来を本尊とした東仙寺であり、戦国乱世の中で村民は信仰を心の拠り所として、薬師如来の慈悲にすがることにより除病延寿・衣食満足を心から願ったものでした。

寺歴は明確ではありませんが、最初は戸狩山の中腹にあったのではないかと推測され、乱世の安定化とともに戸狩城の武家屋敷跡に移転したと推測されております。

貞享3年（1686）正宗寺の雲海祖瑞和尚が再建し、文久元年（1861）3月正宗寺の十二世禮宗和尚が、ここに小庵を設け法灯を再興されました。

現在、当寺の入口にある石塔は、その時、戸狩山の中腹から移転したものです。

第二次大戦後、当寺院が荒廃するなか、中野祖溪和尚によって手が入り現在の姿になりました。

今日、人の付き合い方も複雑となり精神的に不安を感じることが多くありますが、東仙寺の薬師如来を参拝し、心の安らぎを得てほしいと願っています。



西国三十三ヶ所供養塔



東仙寺最古の石塔

御 詠 歌
にちげつの みかげうるわし
東仙寺
やくこにみちし じひのみ心



西国三十三ヶ所石仏群

（取材協力 臨済宗妙心寺派 薬王山東仙寺元堂守 中野正明 氏）